

### 序 文

オガサワラシジミとオガサワラカワラヒワは、なんとか母島で守っていかねければ、いつしかそんな思いを持って日々調査に取り組んでいました。

2016年頃のオガサワラシジミ減少、6年以上調査に関わってきた現場の感覚から、危機的状況であることを関係者に何度も訴えました。しかし、新たな保全対策は進まず、2019年6月以降目撃が途絶え、最後の望みであった域外飼育個体群も消滅しました。地球上から一つの生き物がいなくなってしまうことに、強い喪失感を覚えました。世界自然遺産、国立公園、国内希少野生動植物種、保全を後押しする様々な法律や条件が整っているのに、なぜ。また、一番近くで観察を続けてきた現場の感覚が、関係者に伝わらない無力感がありました。

一方、オガサワラカワラヒワについては、私の博士課程の研究テーマとして2014年から本格的な調査を始めました。開始当初から個体数が少ない状況でしたが、2018年頃からはオガサワラシジミの後を追いかけるように、オガサワラカワラヒワも目撃数が減少していきました。オガサワラシジミの教訓は活かされず、減少が明らかになっても保全対策は行われませんでした。

2019年4月、まだ間に合う、この鳥を絶滅させるわけにはいかないと強く思い、絶滅寸前だったアカガシラカラスバトの保全に尽力した小笠原自然文化研究所に相談を持ちかけました。最初に言われたのは、「絶滅危惧種を保全することは並大抵のことではない、相当の覚悟が必要だぞ」ということでした。その言葉は今も記憶に新しいです。

1年後の2020年3月には前職の東京都レンジャーを退職し、9月には専門家によるワークショップ、12月にはオガサワラカワラヒワ保全計画づくりワークショップを開催することになりました。島内外の専門家、研究者、島民、NPO・NGO、行政等、オガサワラカワラヒワを知っている人も知らない人も、見たことがある人も見たことがない人も、この鳥を守るために100名以上が集まって真剣に議論し、素晴らしい保全計画が策定されました。

ワークショップの開会の挨拶をさせていただいた際に、参加者の皆さんにお伝えした大切なことが2つありました。

ひとつは、協力、連携していくこと。

当初、母島で守っていかねければならないという思いが原動力となりましたが、ワークショップを経て、関係する全ての人たちが協力、連携していかねければ絶滅を回避できないという思いに変わりました。

もうひとつは、自分のこととして考えること。

誰かのせいにしてたり、他人に任せたりするのではなく、自分ができていることを考えていくことが重要です。私も、保全対策が進んでいかねばならないことを、誰かのせいにしていたと気付かされました。自分たちのこととして考えることで、責任が生まれ行動につながるのです。

島内外の様々な関係者が協力し、自分たちのこととして考えた結果が、このレポートにまとめられています。たくさんの方々の思いが詰まったこのレポートが、オガサワラカワラヒワの保全だけでなく、小笠原の自然を未来へと引き継ぐための新たな一歩となると信じています。また、小笠原

諸島だけではなく、日本、そして世界中の絶滅危惧種保全に、少しでも貢献できる内容があれば嬉しい限りです。最後になりましたが、このワークショップに関わっていただいた全ての方々に心から感謝いたします。

オガサワラカワラヒワ保全計画づくりワークショップ 実行委員長  
川口 大朗